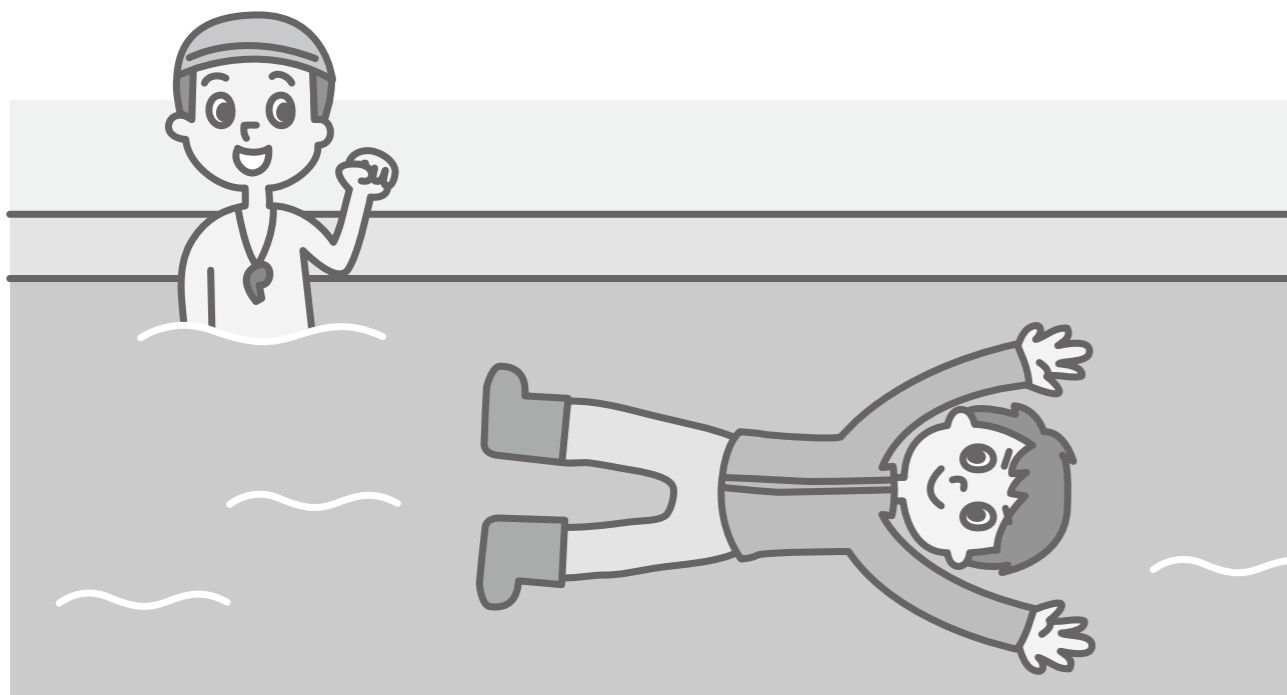


水ナビ③ 着衣泳

水難事故を想定した体験プログラム



ねらい

日本の水難事故は、先進国の中でも高い割合で発生しています。身近に水は存在するため、昔の「水には近寄らない」と言う指導では、事故は無くなりません。着衣泳は、水の安全について正しい知識と誰にでもできる対応を学ぶプログラムです。

会場準備

- ・着衣泳は、水泳に向けた清潔で静かな水面があれば実施可能です。カヌーやヨットなどの体験プログラムなどと共に実施することも可能です。しかし、児童が不安なく着衣泳を実施するには日頃から親しんだプールを会場とするのが最適でしょう。
- ・プールは、水際や水底・水深などが一定であるため、変化に富む自然水面と比較して、安全に多人数を対象にプログラムを実施することが可能です。

<注意点>

通常水着で入水するプールを着衣で利用するには、いくつかの問題が発生します。

- ①衣服や靴の持込みによるプール水質の悪化
←清潔な衣服・器材を用意する。
- ②他の利用者がある場合、苦情の発生←実施前からプログラムの趣旨を張り紙などで告知する。

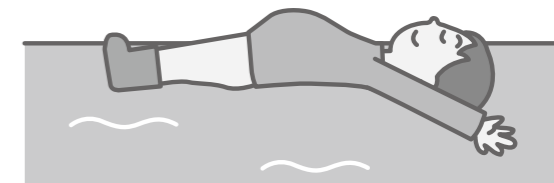
また、事前に映像を使った座学を実施するため、参加者全員が集まることのできる、映像の表示が可能な講習会場があると効果が上がります。ただし、会場の確保ができない場合、プールサイドで紙芝居形式の座学講習を実施することも可能です。

POINT!

※水難事故の現場に適切な救助器具が用意されていることは期待できません。そのため、身近にある物を救助に利用できることを学びます。事前に映像を使った座学を実施できる場合は、パソコン・プロジェクター・スクリーンをご準備ください。説明資料の参考となるpptデータをB&G財団HP (<http://www.bgf.or.jp>) からダウンロードできます。

POINT!

着衣泳では、日頃プールで泳ぐ時に着る水着と、普段の生活で着ている服装が水の中でどのように異なるのか？を体験することが大切です。夏に実施する場合でも「Tシャツ+半ズボン」では、水着との違いが分かりにくい結果となってしまいます。そのため、「長袖+長ズボン」の着用が必要です。特に泳力の低い参加者には、空気が溜まり浮力となるウインドブレーカーを着用させるとプログラムを容易にします。



準備器材

- ・ロープ状の物（包装用紐、なわとび紐、ホース、ベルト）、棒状の物（デッキブラシ、ほうき、傘）、浮く物（ボール、発泡スチロール、ペットボトル、ビニール袋、キャンプマット）、ライフジャケット

参加者の準備

- ・水着、水泳帽子、ゴーグル、タオル
- ・「水だけで洗った」長袖の上着、長ズボン、靴
- ・2ℓくらいのペットボトル、ビニール袋（レジ袋でOK）
- ・着替え、タオル、濡れた服を入れるビニール袋

<注意点>

プールに服を持込むと、繊維クズや服の汚れによって水が汚れます。また、服を洗濯した際に残った洗剤や蛍光剤などの化学成分はプール水のろ過機では除去できません。そのため、着衣泳で使用する服は、「水だけで洗濯」した服を持参させてください。